

日本・ナイルエチオピア学会第10回学術大会・公開シンポジウム

## 「ナイルの水が育む世界—その歴史的変遷—」

### 開 催 趣 旨

川床 睦夫

ナイル流域世界の最下流に位置するエジプトは「ナイルの賜物」であろうか？

ナイルは生み・育み・与え・蓄える、恵み深いものであるという一面と、同時に奪い・破壊し・苦難を強いるものでもあるという一面を持っている。まさに、ナイルは「豊穡と破壊」の源なのである。

青ナイルと白ナイルが合流するハルトゥームの北（下流）では、上流域の乾季と雨季の影響でナイルが定期的に増水と減水を繰り返すこととなる。下流域では増水期にナイルの水が石灰岩からなる河岸段丘の麓までに及び、まるで大きな湖の中に島々が浮いているような様相を呈する。高台に作られた集落が島のように増水した水の中に浮かぶ様子は19世紀、20世紀の写真にも見られるところである。この時期、人々は葦船、筏などに乗って島状集落間を移動することとなる。減水が始まると、低地の下流側に石垣を築いて溜池を作り、灌漑用水にする農業が行われた。上エジプトの人々が季節労働者としてデルタ地域に赴き、灌漑水路を浚渫し、溜まった肥料となるスilt（沃土）を土手に積み上げた。

定期的に繰り返し起こるナイルの増減水は、人々の生活の基盤をなすものとなり、これを基に暦が整備された。ナイルはエジプトのすべてとなり、古代に作られた暦は改良されながら現在に至るまで使用され続けている。コプト暦である。

コプト暦によると、パウーナ月11日（西暦6月18日）に奇蹟の一滴がナイルに落ちる。古代エジプト時代の伝説によれば、イシス女神の涙の一滴がナイルに落ち、増水が始まるというのである。順調に増水すると、2ヶ月ほどでナイルが適正水位に達するであろうことが宣言される（ワファーウ・アンニール）。そして、現在のカイロ市内ポートサイド通り

の下を走っていた運河の水門が開かれた（ヤウム・アルハリージュ）。ミスラー月17日（西暦8月23日）である。9世紀の歴史家イブン・アブド・アルハカムの『エジプト征服史』によれば、かつて、ナイルの適正な水位が達成されるようにとの祈願をこめて「ナイルの花嫁」がナイルに投げ込まれていた。7世紀半ば、アムル・ビン・アルアースがエジプトを征服した時、この野蛮な風習を廃止したと伝えられている。

トゥート月16日（9月26日）にナイルの水位は最高位に達する。これが適正水位の範囲内にあると、すべての作物が豊かに実り、平和がエジプト中に満ちるのであった。その後、水は徐々に引き、バシヤンス月27日（6月4日）にナイルの水位は最低位に達するのである。

このようなナイルの水位を中心に、コプト暦には農業、果樹、養蜂、水の透明度、井戸の状態、飲料水、天候、風と帆船の航行などについて詳細な記述が見られる。

ナイル河谷に住む人々は、人と家畜の飲料水をナイルから汲んでいる。しかし、コプト暦によれば、ナイルの水が透明になるのは、毎年2月初旬の一週間程度で、増減水するナイルの水は常に汚れていたのである。よって、ナイルの水を飲むためのさまざまな注意事項がその時々の水の状態に応じて記載されている。いずれにしても、煮沸、濾過、薬品投入などの加工をしなくては飲むことができなかった。汚水はたびたび疫病流行の原因となったのである。また、濁んだナイルの水に住む巻貝はビルハルツ住血吸虫を媒介した。

それでも、ナイルは生活のさまざまな局面で中心的な位置を保ちつづけている。飲料水、洗濯、洗浄・



1976年のレンガ造り

沐浴、レジャー空間、ゴミ捨て場などの重要な場である。そして、観光産業の重要な目玉商品でもある。風景、フルーカ、船上ホテル・レストランなどナイルなしにはエジプト観光は成り立たないのである。ファティマ朝時代に見世物小屋などがナイル河畔に立ち並んでいたことを考えると、レジャー空間としてのナイルの重要性が決して現在だけのものではなかったことがわかるのである。

ナイルは、いつの時代にも生産・流通・生活・消費・廃棄の場、宗教の場、娯楽の場として有効利用されていたのである。

生産の場としては、農業、牧畜、漁業、狩猟（鳥類、ワニ）、建築材料採取などが挙げられる。現在でも、小麦、米、綿花、サトウキビ、オレンジなどの生産は重要な外貨収入源である。プルティ（ナイル・パーチ）、ナマズをエジプト人はよく食べるし、ボラとファスィーフ（ボラからつくる塩辛のようなもの）は好物である。

また、ナイルが運ぶスィルト（黒色沃土）は土器・陶器のなどの焼き物、建築材料として極めて重要であ

る。古代以来、人々は食料の保存、調理、運搬、食器として焼き物を用いた。そして、スィルトを捏ねて型に入れて作った日干レンガやそれを焼いて作った焼成レンガで住居などを建てた。ただし、現在では、アスワン・ハイ・ダムのためにエジプトに流入するスィルトの量が減ってしまったため、スィルト採取は禁止されてしまった。

流通の場としては、ナイル水運なしにエジプトを語ることはできないほどである。流れを利用して南から北へ、風または人の力を利用して北から南へ、人とさまざまな物品が移動した。

最後に、注目すべきことはティグリス・ユーフラテス川、インダス川など旧大陸の大河が北から南に流れるのに対し、ナイルは南から北に流れていることである。こうして、エジプトをはじめとする流域世界に特有の自然観、世界観、神・神話、祝祭が生まれ育ったのである。

1972年にエジプトに留学して以来、ナイルと慣れ親しんできた。当時、まだ増減水を見せていたナイルは、今や、完全にアスワン・ハイ・ダムの水門の開閉によってコントロールされてしまった。ナイルは異様な姿に変貌してしまった。農地への化学肥料導入の原因となってしまった。水害・塩害を引き起こし、遺跡破壊の原因となってしまった。

今、改めてエジプト、スーダンのナイルの水が育んだ世界を見直して「ナイル」、[ナイルの水]の意味、果たした役割、将来像などを考えてみたい。

(かわどこ むつお 中近東文化センター)



カイロのローダ島の南端に作られたナイルメーター（9世紀のもの）。古代以来、エレファンティン島に建造されたものが上エジプト、この地に建てられたものが下エジプトの租税の基準となった。